



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	宮沢賢治 像の生成と受容の変遷をめぐる文化研究(審査結果の要旨)
Author(s)	構,大樹
Citation	
Issue Date	2017-03-23
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/147694">http://hdl.handle.net/2309/147694</a>
Publisher	
Rights	

## 審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

本論文は宮沢賢治の作品群、近親者や知人の伝記的記述、評論家・作家の賢治に対する言及など、多様な言説から構成されたイメージとしての宮沢賢治（以下〈宮沢賢治〉と表記する）に注目し、そのイメージの変遷、受容状況を通時的に探り、文学場、学校教育場、現代のポピュラーカルチャー内で〈宮沢賢治〉が生起されるに至った社会的、文化的状況を明らかにすることを目指したものである。賢治イメージについて言及され語られるさいの枠組みを析出し、いかなる意味付けがなされたのか、なぜその意味付けが受け入れられたのか、その意味を成立させた環境はいかなるものだったのか、という問いかけを前提にした賢治研究は、個別的な作品に関する研究、ある特定の時期を扱った研究は散見されるものの、生前の賢治から現在に至るまでの通時的な視点から行われた研究は存在しない。その意味で本論文の意義、および本論文の研究の独創性はきわめて高い。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本論文は、宮沢賢治の生前から現代に至るまで、絶えず行われている〈宮沢賢治〉の生成と受容の様態を通時的に分析し、その変遷を歴史的に跡づけるものである。また本論文では、各時代の〈宮沢賢治〉をめぐる言説編成のプロセスを明らかにし、潜在するイデオロギーや権力構造を読み取っている。その主な分析対象は、〈宮沢賢治〉に文学的な価値が見出されていく賢治生前からアジア・太平洋戦争終結までの文学を中心とした言説空間、ついで、優れた作家として認定された〈宮沢賢治〉が学校教育を介して広く定着していく戦後国語教育の言説空間、最後に、こうして定着した〈宮沢賢治〉が他領域で再生産される最前線としてのポピュラーカルチャーの言説空間である。こうした視点からの分析は、従来の日本近現代文学研究における作家論、作品論、テキスト論といった方法論では処理しにくい。カルチュラル・スタディーズを踏まえた文化研究による本論文の分析手法は、問題提起に見合った適切な選択である。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

本論文は文学場、学校教育場、ポピュラーカルチャーの場といった複数の言説空間における〈宮沢賢治〉を明らかにすることを目的としているため、従来の賢治研究に見られる作品分析、作家研究の枠組みにとどまらない、より広い領域における研究資料やデータの収集が行われている。そのプロセスのなかで新たに掘り起こされた資料も多い。例えば戦中期における『詩歌翼賛』、満州開拓青年義勇隊訓練本部編『国語 下の巻』、劇団東童と賢治の関係をめぐる資料、火野葦平「美しき地図」などは、本論文で光が当てられたとあっていい資料体である。本論文のテーマに関わる先行研究もほぼ網羅されており、バランスのよい論述がなされている。以上の点で、本論文では適切な研究資料やデータの収集と分析がなされていると言える。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

本論文は第一部で、〈宮沢賢治〉における文学的価値の生成について、同時代的な文学場の言説編成との相互作用から検討を試み、今日の賢治評価に繋がる文学的価値の生成プロセスを明らかにしている。また第二部では、学校教育場を分析対象とし、戦後の国定教科書に教材として掲載されつづけている〈宮沢賢治〉の様相を示すとともに、戦前の国語教科書などで戦時下イデオロギーと結びつつ評価された賢治が、戦後においても価値の逆転が生ずることなく、変わらぬ高い評価を得てきた理由を明らかにする。第三部では、第一部と第二部の分析を踏まえ、現在〈宮沢賢治〉がポピュラーカルチャーの場のなかでどのように受容され再生産されているかについて、夢枕獏のテキストや映画「グスコブドリの伝記」などを具体例として分析を試みている。個々の論考は緻密な分析の上に成り立っており、それらの論考は各所で適切な流れの下に配置されている。資料の提示、先行研究への目配りも過不足なく妥当な結論へと導かれており、学位論文にふさわしい学術的な水準に達していると判断できる。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本論文は、今日の宮沢賢治イメージが、1935年前後の文学場における言説編成から始まり、戦時下の文学場における「雨ニモマケズ」の中心化によって確立されたものであることを示すとともに、戦後から現代に至るまで、学校教育のなかで賢治作品が高く評価され、賢治イメージの再生産が継続しているそのプロセスを明らかにした。その結果本論文は、日本近現代文学研究における〈作者〉研究の文脈において、〈作者〉はいかなる条件によって長期的に維持され、どのように変遷するのか、という問題に対する貴重な分析例を提供することに成功している。さらに、学校教育場における賢治作品の受容の様態を探ることで、あるテキストが教材となり、一般教養として定着した結果、ポピュラーカルチャーの領域で再構成される具体例を示すことにも成功している。本論文が従来の宮沢賢治研究のみならず、日本近現代文学研究、国語教材研究、サブカルチャー研究に寄与する部分は大きく、よってその研究成果は高く評価できる。